

研究業績等に関する事項

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概 要
(著書(欧文)) なし				
(著書(和文)) なし				
(学術論文(欧文)) 1. Adaptation Status and Related Factors at 2 Time Points After Surgery in Patients With Gastrointestinal Tract Cancer (査読付) (消化管がん患者の手術後2時点での適応状態と関連因子)	共著	2011年1月	Cancer Nursing. Vol. 34 No. 1 p 41-48	消化管がん患者25名を対象として、外科手術後の適応状態を考察するために、退院2週間後と術後6カ月のQOLとSOLの質問紙調査を実施した。その結果、術後6ヶ月のQOLとSOLは退院2週間後より向上しており、適応状態は改善していたことが明らかになった。しかし社会的支援の知覚が減少していたことから、社会的関係への支援が必要であることが示唆された。 共著者: Michiyo Mizuno, Yoshihiro Asano, Tomomi Sumi, Yumiko Inoue 分担部分: 共同研究のため本人担当 分抽出不可能
(学術論文(和文)) 1. 家庭における親から子どもへの「いのちの教育」に関する研究—Death Education に焦点をあてて—  2. 離職者が少ない病院に勤務する看護師のキャリア・アンカーとキャリア・ニーズに関する実態調査 (査読付)	単著  共著	2007年3月  2015年4月	茨城県立医療大学大学院修士論文  日本看護学会論文集: 看護管理 45号 p 110-113	「Death Education」とは、死を身近な問題として考えることで生の大切さを学ぶ教育である。近年は、子どもたちの死に対する認識が不十分であると指摘されていることから、家庭におけるDeath Educationの実態調査を行った。小学校4～6年児童の親285名の回答は、Death Educationに関心があるが約96%、必要性を感じているが約98%、実施している親が約77%、難しいと感じるが約74%、支援を必要としているが約86%であった。多くの親がDeath Educationを家庭で行うべきだと思える反面、困難感があり、支援を求めていることから、親を対象としたDeath Educationの機会が必要であることが示唆された。  離職者が少ない病院に勤務する臨床経験2年以上の看護師373名を対象として、キャリア・アンカー尺度と自作のキャリア・ニーズ質問紙を用いた実態調査を行った。有効回答は292名で、キャリア・アンカーに「安定性」を持ち、キャリア・ニーズに「現状維持志向」を選択する看護師が多かった。子育て世代が多く、家庭での役割が大きいことが影響していると考えた。キャリア開発は、個々のキャリア・デザインを理解した上で適切な時期に支援していく必要があることが示唆された。 共著者: 半田育子, 角智美, 國谷美香, 吉良淳子 分担部分: 共同研究のため本人担当 分抽出不可能

3. 終末期ケアに携わる看護師のストレスに関連する要因（査読付）	共著	2015年6月	看護教育研究学会誌7巻（1号） p49-58	<p>終末期ケアに携わる看護師の役割意識とストレスとの関連性を特定することを目的に、看護師500名に質問紙調査を行った。有効回答は331名で、「終末期と急性期患者が混在していること」「終末期ケアよりも他のケアが優先されること」「治療の方向性がはっきりしないまま亡くなる患者が多いこと」に高いストレスを感じ、自身の能力不足が原因だと感じていた。ストレス対策には、知識の習得やチーム医療の推進が示唆された。</p> <p>共著者：角智美，森千鶴，水野道代 分担部分：研究代表者として研究計画から執筆まで担当</p>
4. 臨床看護師の看護研究に対する自己効力感とその関連要因（査読付）	共著	2017年1月	茨城県立病院医学雑誌33巻(1号) p7-13	<p>看護研究に積極的に取り組む看護師が少ないことから、臨床看護師474名を対象に「臨床看護師の臨床研究に対する自己効力感尺度」を用いて質問紙調査を行った。有効回答は361名で、約90%が看護研究を行った経験があったが、60%以上は関心や意欲がなかった。臨床研究に対する自己効力感は「研究環境の調整・確保」が最も低かったことから、看護管理者の役割として、研究時間や資源等の環境を整える必要があることが示唆された。</p> <p>共著者：角智美，角田直枝，森千鶴 分担部分：研究代表者として研究計画から分析、執筆まで担当。</p>
5. 臨床看護師の倫理的感受性尺度の開発	単著	2017年4月	筑波大学大学院博士論文	<p>これまで看護倫理教育の評価に活用できる尺度がなかったことから「臨床看護師の倫理的感受性尺度」の開発に至った。調査項目は、臨床看護師が日常的に体験する倫理的問題100事例から抽出し、現実適合性、表現内容、妥当性の検討を行った。その後施設1,911名の看護師を対象に、28項目の試作版尺度において信頼性と構成概念妥当性、基準関連妥当性を検討した結果、14項目1因子が抽出された。しかしクロンバック<math>\alpha</math>係数が0.42~0.77と低く、今後の課題として、項目分析・因子分析の再検討の必要性が示唆された。</p>
6. A県立2病院における中堅看護師の学習ニーズ・教育ニーズの実態—中堅看護師の継続教育プログラムの構築に向けて—（査読付）	共著	2017年5月	茨城県立病院医学雑誌33巻（2号） p1-10	<p>中堅看護師の継続教育プログラム再構築の資料とするために学習・教育ニーズを特定することを目的に実務経験6年~21年未満の中堅看護師327名へ質問紙調査を行った。有効回答は239名で、学習ニーズは「看護の基本的知識・技術」が高く「研究推進・社会情勢」は低かった。実務年数が多いほど学習ニーズは高く、教育ニーズは低くなっていた。これらのことから中堅看護師の特徴を考慮した看護継続教育プログラムの必要性が示唆された。</p> <p>共著者：高村祐子，吉良淳子，旭佐記子，脇田泰章，角智美，中村洋一 分担部分：共同研究のため本人担当 分抽出不可能</p>

<p>7. 臨床看護師の倫理的 感受性尺度の開発と 信頼性・妥当性の検 討（査読付）</p>	<p>共著</p>	<p>2018年3月</p>	<p>日本看護倫理学会誌 10巻（1号）p36-44</p>	<p>臨床看護師の倫理的感受性を測定する尺度の信頼性・妥当性を検討するために、予備調査を経て作成した試作版尺度の項目分析、因子分析を行った結果「尊厳の意識」「専門職としての責務」「患者への忠誠」の3因子19項目が抽出され、クロンバックα係数は0.6～0.8と内的整合性が確認された。また構成概念妥当性を既知グループ技法で検討した結果、看護倫理研修を受講した看護師は、受講していない看護師よりも得点が有意に高く、倫理的感受性を測定する尺度として活用できることが確認された。 共著者：角智美，森千鶴 分担部分：研究代表者として研究計画から分析、執筆まで担当。</p>
<p>8. 急性期病院の病棟看 護師が実践する退院 支援とその関連要因 （査読付）</p>	<p>共著</p>	<p>2018年4月</p>	<p>日本看護学会論文 集：在宅看護 48号 p 19-22</p>	<p>急性期病院の病棟看護師が実践する退院支援とその関連を特定することを目的に「在宅の視点のある病棟看護の実践に対する自己評価尺度(山岸ら, 2015)」を用いて病棟看護師278名に質問紙調査を行った。有効回答は196名で、病棟看護師は十分な退院支援ができていないと評価していた。そして退院支援の実践には、訪問看護経験が関連していた。よって教育方法には訪問看護の実践が重要であることが示唆された。 共著者:角智美, 池田美智子, 角田直枝 分担部分：研究代表者として研究計画から分析、執筆まで担当。</p>
<p>9. 茨城県における訪問 看護出向事業の成果 出向した病院看護師 と看護管理者へのア ンケート調査から （査読付）</p>	<p>共著</p>	<p>2020年3月</p>	<p>茨城県立病院医学雑 誌 36巻（2号）p 21-30</p>	<p>病院看護師が病院との労働契約を維持したまま訪問看護ステーションと労働契約を結び、訪問看護に従事する「訪問看護出向事業」が開始され、茨城県では2015～2017年度に9施設21名の病院看護師が出向した。そこで茨城県における訪問看護出向事業の成果を得ることを目的に、出向した病院看護師と看護管理者へアンケート調査を実施した。その結果退院支援の実践評価は、出向した看護師の方が出向していない看護師よりも高く、看護管理者は病院-地域間で連携する機会が増えたと感じており訪問看護出向事業の成果はあったと言える。 共著者:角智美, 角田直枝, 白川洋子 分担部分：研究代表者として、研究計画から執筆まで担当。</p>

<p>10. 新型コロナウイルス感染拡大下における看護系大学4年生の意識と職業的アイデンティティとの関連 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2021年10月</p>	<p>茨城県立病院医学雑誌37巻 p 39-48</p>	<p>新型コロナウイルス感染拡大下の看護学生が就職に向けてどのような意識を持っているのかを把握するために医療系大学看護学科4年生46名を対象にWeb調査を行った。調査内容は「医療系学生用職業的アイデンティティ尺度(藤井ら, 2002)と臨地実習中止による不安、就職への不安等の程度であった。その結果「風評被害があっても看護職になりたい」と約76%が感じていたが、約62%は「このまま就職することに不安がある」と回答した。職業的アイデンティティが3年時よりも低下しており、新人看護師を受け入れる施設において、教育方法を検討する必要性が示唆された。 共著者：梶原由佳, 角智美 分担部分：第一著者の研究過程全般を指導、及び執筆一部修正・加筆した。</p>
<p>(紀要論文)</p> <p>1. リハビリテーション看護学実習における学生の学び-学生の実習記録から- (査読付)</p> <p>2. 看護学生がOSCEの際に経験する緊張の要因と影響 (査読付)</p>	<p>共著</p> <p>共著</p>	<p>2005年3月</p> <p>2010年3月</p>	<p>茨城県立医療大学紀要10巻 p 85-95</p> <p>茨城県立医療大学紀要 15巻 p 14-25</p>	<p>リハビリテーション看護学実習を通して学生がどのようなことを学んだかを把握するために、研究に同意した学生25名を対象に、実習後の「学びと感想」の記録を内容分析し、実習目標と照らし合わせた。その結果「自己洞察・自己の課題の明確化」「保険医療福祉チームにおける看護の役割」についての学びがあげられる一方、「社会的側面」についての記述が少なく、実習目標が達成出来るような方策を検討する必要性が示唆された。 共著者：永山弘子, 市村久美子, 黒木淳子, 宮林幸江, 丹下幸子, 角智美, 堀内ふき 分担部分：共同研究のため本人担当抽出不可能</p> <p>OSCEを受けた看護学生の感想で「緊張により技能が十分に発揮できなかった」と述べるが多かった。そこで5名の学生にOSCEを受けた時にどのようなことで緊張を感じたのかをインタビューし、KJ法によってアンケート項目を作成した。その後OSCEを受けた看護学生105名を対象に質問紙調査を行った結果、緊張の要因は「不合格への不安」と「自分の技術の未熟さ」があり、モデル人形や器械の使用による不自然な環境や教員の言動が影響していたことから、OSCE実施の改善点が示唆された。 共著者：山海千保子, 浅川和美, 角智美 分担部分：共同研究のため本人担当抽出不可能</p>

<p>3. 子どもへのDeath Education行動に関連する親の意識 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2012年3月</p>	<p>茨城県立医療大学紀要17巻 p 41-50</p>	<p>子どもへのDeath Educationには親の意識が関連するとの仮説を立て、小学4～6年児童の親678名を対象に計画的行動理論を概念枠組みとした量的調査を行った。有効回答は285名で、Death Educationへの意欲は、Death Educationへの関心と、Death Educationが子どもにとって生きる意味を考えさせると捉える態度によって高まり、Death Educationに関心がない親は意欲も低かった。意欲を高めるためには、学校と地域が連携して親のサポートをしていく体制づくりが必要であることが示唆された。 共著者：角智美、川浪公香、市村久美子 分担部分：研究代表者として研究計画から分析、執筆まで担当。</p>
<p>4. 緩和ケア臨床に携わる看護師の変容的学習と適応的熟達化 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2020年3月</p>	<p>常磐大学大学院学術論究 6・7 p11-23</p>	<p>変容的学習とは、価値や思考を柔軟に変容させる学習である。緩和ケアを実践する看護師27名を対象に、緩和ケアを実践する職場で変容的学習が生じるのか、経験年数との関連も含めて検証した。その結果緩和ケアを実践する看護師は、死生観、幸福感といった個人的価値観に関わる側面が大きく変化していることがわかった。そして変容的学習は経験年数と共に習得する実践知の内容を変化させながら、緩和ケア看護の適応的熟達化を促進させることが示唆された。 共著者：渡辺めぐみ、伊東昌子、角智美、三橋彰一 分担部分：共同研究のため本人担当 分抽出不可能</p>
<p>(辞書・翻訳書等)</p>				
<p>なし</p>				
<p>(報告書・会報等)</p> <p>1. 思いやりの心を表現する看護倫理</p>	<p>単著</p>	<p>2018年12月</p>	<p>看護教育研究学会誌 10巻(2号) p.81-86</p>	<p>第12回看護教育研究学会学術集会会長講演の内容を一部加筆・修正し執筆した論文である。「思いやりの心」を表現するために、現代の看護倫理理論となる徳の倫理、原則の倫理、ケアの倫理の知識と、倫理的問題への倫理的意思決定プロセスが大切であり、さらには患者－看護師間の信頼関係を築くケアの倫理が重要。人間性に根ざすヒューマン・ケアリングを発展させ、看護専門職としていかに職業化していくかが課題であることを解説した。</p>

(国際学会発表) なし				
(国内学会発表) 1. 領域別実習の中間期におけるOSCEによる形成的評価の有効性-OSCE実施後の学生アンケート調査から-		2005年7月22日	第31回日本看護研究学会学術集会(札幌)	OSCEの有効性を検証することを目的に、研究に同意があった学生48名を対象にOSCE後に実施項目とフィードバックの適切さ、自己の課題について質問紙調査を行った。その結果90%が「今後の課題が明らかになった」と回答し、OSCEが学習の動機づけとして有効であったことが明らかとなった。 共同者：浅川和子、市村久美子、小室佳文、富田美加、金子昌子、梶原祥子、池田智子、島田智織、丹下幸子、糸嶺一郎、黒木淳子、加納尚美、田村麻里子、間野聡子、角智美、前田和子 分担部分：共同研究のため本人担当 分抽出不可能
2. 急性期・回復期におけるリハビリテーション看護の検討-回復期病棟での調査から-		2006年12月3日	第26回日本看護科学学会学術集会(大阪)	急性期と回復期リハビリテーション過程における看護の役割を検討する目的で、患者131名に聞き取り調査を行った。その結果、心理療法を13人が回復期において受けていたが、急性期では0であり、急性期における患者の心理機能へのケアの必要性が示唆された。 共同者：金子昌子、野々村典子、永山弘子、間野聡子、角智美 分担部分：共同研究のため本人担当 分抽出不可能
3. 家庭における親から子どもへのDeath Educationの実態		2008年8月21日	第34回日本看護研究学会学術集会(神戸)	子どもへのDeath Education行動に関する実態調査として小学4~6年児童の親678名に質問紙調査を行った。有効回答は285名で、約96%の親がDeath Educationに関心をもち約77%が実施していた。しかし約74%が困難感を持ち意欲の低下に関連していたことから、親へのサポートが必要であることが示唆された。 共同者：角智美、黒木淳子、市村久美子 分担部分：修士論文の一部を加筆修正したものであり、執筆まで担当。

<p>4. 看護学生がOSCEの際に経験する緊張に関する検討</p>	<p>2009年8月4日</p>	<p>第35回日本看護研究学会学術集会（横浜）</p>	<p>OSCEを受けた看護学生の感想で「緊張により技能が十分に発揮できなかった」と述べるが多かった。そこで5名の学生にOSCEを受けた時にどのようなことで緊張を感じたのかをインタビューし、KJ法によって分析したアンケート項目を作成した。その後OSCEを受けた看護学生105名を対象に質問紙調査を行った結果、緊張の要因は「不合格への不安」と「自分の技術の未熟さ」があり、モデル人形や器械の使用による不自然な環境や教員の言動が影響していたことから、OSCE実施の改善点が示唆された。 共同者：山海千保子、角智美、浅川和美 分担部分：共同研究のため本人担当 分抽出不可能</p>
<p>5. 終末期ケアに携わる看護師の役割とストレスとの関連</p>	<p>2012年12月1日</p>	<p>第32回日本看護科学学会学術集会（東京）</p>	<p>終末期ケアに携わる看護師の役割意識とストレスとの関連性を特定することを目的に、看護師500名に質問紙調査を行った。有効回答は331名で、「終末期と急性期患者が混在していること」「終末期ケアよりも他のケアが優先されること」「治療の方向性がはっきりしないまま亡くなる患者が多いこと」に高いストレスを感じ、自身の能力不足が原因だと感じていた。ストレス対策には、知識の習得やチーム医療の推進が示唆された。 共同者：角智美、水野道代 分担部分：研究代表者として研究計画から執筆まで担当</p>
<p>6. 離職者が少ない病院に勤務する看護師のキャリア・アンカーとキャリア・ニーズに関する実態調査</p>	<p>2014年9月26日</p>	<p>第45回日本看護学会-看護管理-学術集会（宮崎）</p>	<p>離職者が少ない病院に勤務する臨床経験2年以上の看護師373名を対象として、キャリア・アンカー尺度と自作のキャリア・ニーズ質問紙を用いた実態調査を行った。その結果、有効回答は292名で、キャリア・アンカーに「安定性」を持ち、キャリア・ニーズに「現状維持志向」選択する看護師が多いことが分かった。その背景には子育て世代が多く、家庭での役割が大きいことが影響していると考えた。キャリア開発には、個々のキャリア・デザインを理解した上で適切な時期に支援していく必要があることが示唆された。 共同者：半田育子、角智美、國谷美香、吉良淳子 分担部分：共同研究のため本人担当 分抽出不可能</p>

7. 地方公立病院に勤務する看護師のキャリア・アンカーに関連する要因	2014年11月30日	第34回日本看護科学学会学術集会（愛知）	<p>地方公立病院に勤務する看護師のキャリア・アンカーに関連する要因を得ることを目的に、勤務年数2年目以上の看護師373名に質問紙調査を行った。その結果、キャリア・アンカーの「安定性」には配偶者・子どもの有無が関連し、現状維持志向のキャリア・ニーズを持つ傾向があった。</p> <p>共同者：角智美，半田育子，吉良淳子          分担部分：研究代表者として抄録作成・発表を行った。</p>
8. 中堅看護師への継続教育プログラムの構築に関する研究-A 県立病院における学習ニード・教育ニード-	2015年8月23日	第41回日本看護研究学会学術集会（広島）	<p>中堅看護師の継続教育プログラム再構築の資料とするために学習・教育ニーズを特定することを目的に実務経験6年～21年未満の中堅看護師327名へ質問紙調査を行った。有効回答は239名で、学習ニードは「看護の基本的知識・技術」が高く「研究推進・社会情勢」は低かった。実務年数が多いほど学習ニードは高く、教育ニードは低くなっていた。これらことから中堅看護師の特徴を考慮した看護継続教育プログラムの必要性が示唆された。</p> <p>共同者：高村祐子，吉良淳子，脇田泰章，角智美，川畑みゆき，寺門通子，旭佐記子          分担部分：共同研究のため本人担当抽出不可能</p>
9. 臨床看護師の倫理的問題に対する意識とその関連因子	2016年8月21日	第42回日本看護研究学会学術集会（つくば）	<p>臨床では倫理的問題が起きていても気がつかない看護師が多いとの仮説から、臨床看護師489名を対象に倫理的問題への意識について調査した。有効回答は401名で、「認知症患者の抑制に関すること」「術後不穏患者の身体拘束」に関する倫理的問題に気が付いている看護師が少なかった。倫理的問題に気が付くことには、事例検討が関連しており、倫理カンファレンスが有効であることが示唆された。</p>
10. 臨床看護師の看護研究に対する自己効力感とその関連要因	2016年10月15日	第10回看護教育研究学会学術集会（東京）	<p>看護研究に積極的に取り組む看護師が少ないことから、臨床看護師474名を対象に「臨床看護師の臨床研究に対する自己効力感尺度」を用いて質問紙調査を行った。有効回答は361名で、約90%が看護研究を行った経験があったが、60%以上は関心や意欲がなかった。臨床研究に対する自己効力感は「研究環境の調整・確保」が最も低かったことから、看護管理者の役割として、研究時間や資源等の環境を整える必要があることが示唆された。</p> <p>共同者：角智美，森千鶴          分担部分：研究代表者として研究計画から分析、発表まで担当。</p>



11. 臨床看護師の倫理的 感受性尺度の信頼 性・妥当性の検討	2016年12月11日	第36回日本看護科学 学会学術集会（東 京）	臨床看護師の倫理的感受性尺度試作 版の信頼性と妥当性を検証する事を 目的とした調査で看護師1209名から 有効回答を得た。その結果、クロン バック $\alpha$ 係数による信頼性と、既知 グループ技法による構成概念妥当 性、基準関連妥当性の検討により信 頼性・妥当性が確認された。 共同者:角智美, 森千鶴 分担部分:本研究は博士論文の一部 を加筆修正したものであり、研究代 表者として、研究計画から発表まで 担当。
12. 看護倫理研修が臨床 看護師の倫理的感受 性に与える影響	2017年8月30日	第43回日本看護研究 学会学術集会（東 海）	看護倫理研修によって臨床看護師の 倫理的感受性は高まるとの仮説を検 証することを目的に、看護師294名に 看護倫理研修会の前後で質問紙調査 を行った。有効回答は262名で、研修 によって倫理的感受性は高まり、特 に患者の人権を尊重した看護の重要 性に気付いていたことから、倫理研 修会の有効性が明らかとなった。 共同者:角智美, 森千鶴 分担部分:研究代表者として研究計 画から発表まで担当。
13. 急性期病院に勤務す る病棟看護師の退院 支援に対する認識と その関連要因	2017年9月15日	第48回日本看護学会 -在宅看護-学術集会 (つくば)	急性期病院の病棟看護師が実践する 退院支援ととその関連を特定するこ とを目的に「在宅の視点のある病棟 看護の実践に対する自己評価尺度(山 岸ら, 2015)」を用いて病棟看護師278 名に質問紙調査を行った。有効回答 は196名で、病棟看護師は十分な退院 支援ができていないと評価してい た。そして退院支援の実践には、訪 問看護経験が関連していた。よって 教育方法には訪問看護の実践が重要 であることが示唆された。 共同者:池田美智子, 角田直枝, 角智 美 分担部分:共同研究のため本人担当 分抽出不可能
14. 茨城県ELNEC-Jコア カリキュラム看護師 教育プログラムの評 価-受講者の研修前 と3ヵ月後の知識・ 実践を比較して-	2018年6月16日	第23回日本緩和医療 学会学術集会（神 戸）	ELNEC-J研修会の評価をするために、 受講者31名の研修前と3ヵ月後のエン ド・オブ・ライフ・ケアの知識と実 践を尺度を用いて調査した。有効回 答は15名で、結果は全項目の知識と 技術の平均値が高まったことから研 修会は有効であったことが分かっ た。しかし「倫理的問題を倫理原則 に基づいて考えること」「チーム内 のアサーティブネス」の実践値は低 いことから研修時に具体的対策を検 討する必要性が示唆された。 共同者:角智美, 角田直枝, 神谷未 加, 久野美雪, 鯉沼とも子, 坂下聖 子, 富山淳江, 松下久美子, 松本俊 子 分担部分:研究代表者として研究計 画から発表まで行った。

15. 公立病院に勤務する看護師の年代による自己教育力の変化	2018年8月10日	第49回日本看護学会-看護管理-学術集会(仙台)	看護師の年代による自己教育力の変化を検証することを目的に、公立病院に勤務する看護師424名を対象に「看護師の自己教育力測定尺度(西村ら, 1995)」を用いて質問紙調査を実施した。有効回答は286名で、20代後半と40代後半の自己教育力が低下していた。20代後半は「キャリア・ドリフト」、40代は「キャリア・プラトール」と言われるキャリアが停滞する時期と考えられることから、各年代の背景を考慮した組織的な教育支援が必要であることが示唆された。共同者：太田敏江, 角智美, 國谷美香, 荻津綾子 分担部分：共同研究のため本人担当抽出不可能
16. 緩和ケア臨床に携わる看護師の変容的学習専門知識技術の習熟と心理的成長	2019年9月11日	第83回日本心理学会大会(大阪)	変容的学習とは、価値や思考を柔軟に変容させる学習であり、緩和ケアを実践する看護師27名を対象に、緩和ケアを実践する職場において変容的学習が生じるのか、経験年数との関連も含めて検証した。その結果として、死生観、幸福感といった個人的価値観に関わる側面が大きく変化していることがわかった。また変容的学習は経験年数と共に習得する実践知の内容を変化させながら、緩和ケア看護の適応的熟達化を促進させることが示唆された 共同者：渡辺めぐみ, 伊東昌子, 角智美, 三橋彰一 分担部分：共同研究のため本人担当抽出不可能
17. 看護学生の臨地実習における臨床実習指導者への評価とその関連因子	2019年12月1日	第39回日本看護科学学会(金沢)	看護学生の臨地実習における臨床実習指導者への評価とその関連因子を特定することを目的に、看護学生305名を対象に質問紙調査を実施した。その結果、複数の患者を受け持った学生の方が看護師への評価が高かった。そして最も低かったのは「実習記録の活用」であり、今後は実習記録の指導方法について検討する必要性が示唆された。 共同者：助川千絵, 角智美, 角田直枝 分担部分：共同研究のため本人担当抽出不可能
18. 臨床看護師の倫理的感受性と認知症患者への看護実践との関係	2020年9月28日	第46回日本看護研究学会学術集会(誌上)	臨床看護師の倫理的感受性と認知症患者への看護実践との関係性を得ることを目的に、看護師473名を対象に質問紙調査を実施した。その結果、倫理的感受性と認知症患者への看護実践の因子間には正の相関( $r=0.2\sim0.4$ )がみられ、有意なパス係数( $0.1\sim0.2$ )が得られたことから、臨床看護師の倫理的感受性は認知症患者への看護実践に影響していたことが明らかになった。共同者：角智美, 森千鶴 分担部分：共同研究のため本人担当抽出不可能

19. 急性期病院のA病棟に勤務する看護師の退院支援に関する勉強会の効果	2020年11月1日～31日	第51回日本看護学会－ヘルスプロモーション－学術集会（オンデマンド配信）	急性期病院で頻繁に緊急入院を受け入れる病棟の看護師11名を対象に、退院支援に関する勉強会を開催し、その効果を「退院支援看護師の個別支援における職務遂行能力尺度（戸村ら, 2013）を用いて検証した。その結果4因子全てが高まり、特に「患者・家族との合意形成力」が高まったことから、勉強会の効果が検証された。 共同者：清水恵，柴崎成美，大島美奈子，角田直枝，角智美 分担部分：研究計画書の作成、分析を行った。
20. 末期心不全患者への多職種連携による緩和ケアと看護師の役割	2021年11月4日	第59回全国自治体病院学会（奈良）	末期心不全患者を対象とした事例を振り返り看護師の役割を考察した。その結果、心不全患者は比較的急速に終末期を迎えており、看護師が患者の状態を判断し、適切な時期に多職種が関わりをもつための調整を積極的に行うことが重要であることが明確になった。 共同者：濱田智子，馬場雅子，田村裕子，府川祐子，伊藤紗知世，角智美 分担部分：共同研究のため本人担当 分抽出不可能
21. 新人看護師の院内研修前後における不安と職業的アイデンティティの変化<第1報>	2021年11月4日	第59回全国自治体病院学会（奈良）	コロナ禍に入職した新人看護師15名を対象に、実習経験不足を補うために実習形式の新人研修を行い、その評価として研修前後の不安と職業的アイデンティティの質問紙調査を実施した。その結果、全ての不安項目が低下したが、職業的アイデンティティも低下していた。先行研究では「新人看護師の職業的アイデンティティは1年間で徐々に低下する」といわれていることから、調査を継続して経過を把握し、教育支援内容・方法を検討していく必要があることが示唆された。 共同者：角智美，秋山順子，太田敏江，國谷美香，角田直枝 分担部分：研究代表者として研究計画から分析、発表まで担当。
22. 急性期病院における看護師への倫理教育－倫理的感受性を育む5年間の取り組みと成果－	2022年3月19, 20日	第9回日本臨床倫理学会（オンライン）	急性期病院の看護教育担当として、看護師約500名を対象に2016年度から5年間で実施した倫理教育の取り組みと成果を発表した。教育内容は、倫理研修会の開催、倫理カンファレンスの実施等であり、臨床看護師の倫理的感受性尺度を用いたアンケートを実施したところ、わずかではあるが倫理的感受性の向上が見られた。
(演奏会・展覧会等)			
1.			
(招待講演・基調講演)			
1.			
(受賞(学術賞等))			
1.			

研 究 活 動 項 目						
助成を受けた研究等の名称	代表, 分担等 の別	種 類	採択年度	交付・ 受入元	交付・ 受入額	概 要
(科学研究費採択) 1. 看護師の臨床経験年数による倫理的感受性の変化と組織的な倫理教育に関する縦断研究	代表	研究活動 スタート 支援	2019年度	茨城県立 医療大学	910千円	研究テーマ「看護師の臨床経これまで臨床経験年数と倫理的感受性の関係性は明確になっていなかった。「臨床看護師の倫理的感受性尺度(角, 森, 2018)」を開発したことから、臨床看護師500名を対象に3年で4回の縦断調査を実施した。その結果、臨床経験年数と倫理的感受性に有意な相関は見られなかった。しかし倫理的感受性には倫理研修や倫理カンファレンスが関連していたことから、看護倫理教育の重要性が再確認できた。 (研究課題番号19K24202)
(競争的研究助成費獲得(科研費除く)) 1. 2. 3. 4.						
(共同研究・受託研究受入れ) 1. 2. 3. 4.						
(奨学・指定寄付金受入れ) 1. 2. 3. 4.						
(学内課題研究(共同研究)) 1. 2. 3. 4.						
(学内課題研究(各個研究)) 1. 2. 3. 4.						
(知的財産(特許・実用新案等)) 1. 2. 3. 4.						